

C.P.E.バッハ／シンフォニア変口長調 Wq.182/2、H.658

ドイツ中部で代々音楽家として活躍したバッハ一族の頂点に立つのは今日私達が大バッハと呼ぶヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)であるが、彼は2度の結婚で20人の子供を授かり、そのうち4人が音楽家として大成した。C.P.E.バッハ、すなわちカール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(1714-1788)は大バッハの次男で、20代半ばでプロイセン王フリードリヒ二世の宮廷音楽家に抜擢され、約30年をベルリンで過ごした後、作曲家テレマンの後継者としてハンブルクの宮廷音楽家となった。そのため「ベルリンのバッハ」及び「ハンブルクのバッハ」のニックネームをもつ。

フルートの名手だったフリードリヒ二世のもとでチェンバロ奏者をつとめていたベルリン時代から、エマヌエルはもはや父親の模倣ではなく、古典派の音楽につながる作品を書いていた。ハンブルク時代も合わせると18曲が残るシンフォニアもそのひとつで、規模こそ小さいが、ハイドンら古典派のシンフォニー(交響曲)の先駆けとなった。本日演奏される変口長調のシンフォニアは、ハンブルク時代の1773年にオーストリアの外交官で音楽愛好家のゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵(1733-1803)の依頼で作曲された弦楽のための6つのシンフォニアの2作目にあたる。スヴィーテン男爵といえば、大バッハやヘンデルの作品のコレクターとして、あるいはモーツァルトやベートーヴェンを経済的に援助した貴族としてその名をご記憶の方も多いただろう。男爵はエマヌエルに作曲を依頼する際、制約なしに思うままに作曲するよう告げたという。そのおかげでエマヌエルは聴衆にわかりやすいようおとなしい作風にしたり、技巧を手加減したりすることなく、男爵の期待どおり創意に満ちあふれたシンフォニア6曲を書くことができた。

この変口長調のシンフォニアでも、楽想が唐突に変化したり、繊細なピアノシモから突然激しいフォルティッシモの響きに変わったり、予想もしない調に突然転調するなど、遊び心ともみえる独創的なアイデアがふんだんに盛り込まれている。快速な第1楽章「アレグレット・モルト」、叙情にみちた第2楽章「ポコ・アダージョ」、そして躍動感に満ちた第3楽章「プレスト」の3つの楽章は、楽譜上はテンポの変化のみ記されてひとつながりになっている。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。